TOGARIISHI SITE

尖石遺跡

―― 平成17年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書 ――

2006.3

茅野市教育委員会

TOGARIISHI SITE

尖石遺跡

―― 平成17年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書 ――

2006.3

茅野市教育委員会

はじめに

茅野市には300以上もの遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000ｍ前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている尖石遺跡です。

永年、地権者の皆さんや地元の人々の理解と熱意によって、保存されてきましたが、近年の開発はついに尖石遺跡の周辺にも及んできました。そこで茅野市では、このすばらしい郷土の文化遺産を保存し、後世に引き継ぐべく昭和62年度から国・県のご援助をいただき、尖石遺跡の公有地化を行い、平成２年度からは引き続き記念物保存修理事業（環境整備）に着手いたしました。

記念物保存修理事業（環境整備）の一環として行われている試掘調査は、尖石遺跡の整備計画を作成していく上での基礎的な調査として実施されているものであります。

その試掘調査も、今回で12回目となりました。平成10年度には、隣接する地にある尖石考古館の新築開館にあわせ、新たに国の特別史跡に追加指定された、従来与助尾根遺跡と呼ばれていた地区の調査も行っています。また、試掘調査に併せ、平成11年度には与助尾根地区のニセアカシアの伐採、復元住居の取り壊し、園路整備を行い、平成12年度には同じく与助尾根地区での復元住居６棟の建設、172本の落葉広葉樹の植栽を行い、史跡公園として尖石地区に先行して整備を行いました。

試掘調査は、その後も継続して行っており、平成13・14・15年度には尖石遺跡の南側と東側の試掘調査を行い、予想を遙かに上回る遺構の検出がありました。

今年度は、考古館の南側の試掘調査を行っています。住居址の検出は１軒と少なかったものの、土坑群の東側からの検出であったことで、尖石遺跡の集落の様子が少しずつ明らかになってきました。

尖石遺跡の試掘調査は、毎年ちょうど夏から秋にかけて行うため、尖石縄文考古館に来館する多くの方々が発掘調査を見学できる場として生かされています。

こうした調査成果をふまえ、今後の史跡整備に一層の努力をして参る所存でありますので、皆様の一層のご協力をお願いいたします。

最後に、この事業の実施にあたってご指導いただいた文化庁、長野県教育委員会をはじめ、調査に参加された関係者の皆様に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成18年３月

茅野市教育委員会
教育長　牛山　英彦

例言・凡例

1. 本書は、特別史跡尖石石器時代遺跡記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書である。
2. 試掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 試掘調査は、平成17年6月27日から9月30日まで行った。
   整理作業は、平成17年10月1日から平成18年3月25日まで行った。
4. 出土品の整理及び報告書の作成は、尖石縄文考古館で実施した。
   本報告書に係る出土品・諸記録は、尖石縄文考古館に保管している。
5. 本報告書の執筆は、小林深志が行った。
6. 図中、「○住」とあるのは○号住居址、「○土」とあるのは○号土坑の略である。図中、Pは土器を、Sは礫を、スクリーントーンは焼土を示す。
7. 調査の体制
   本調査は茅野市教育委員会が実施した。組織は以下の通りである。

特別史跡尖石石器時代遺跡整備委員会

特別委員
- 坪井　清足　（財団法人元興寺文化財研究所所長）

専門委員
- 戸沢　充則　（尖石縄文考古館名誉館長・明治大学名誉教授）
- 清水　潤　（東京工芸大学教授）
- 土田　勝義　（信州大学教授）
- 亀山　章　（東京農工大学教授）
- 佐々木邦博　（信州大学教授）
- 宮坂　光昭　（元長野県遺跡調査指導委員）
- 小平　学　（学識経験者）

指導助言
- 小野　健吉　（文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官）
- 両角　金吾　（長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課課長）

調査主体者
- 牛山　英彦　（教育長）

事務局
- 宮坂　耕一　（教育部長）
- 小平　廣泰　（文化財課長）
- 鵜飼　幸雄　（尖石縄文考古館長・史跡公園係長）
- 調査担当　小林深志（尖石縄文考古館学芸員）

発掘調査・整理作業協力者
牛尾チトセ　太田義明　北沢洋子　栗原昇　小平フサ子　小平長茂　東城久美子
長田真　林賢　宮坂功　山崎裕子　吉田泰孝

目　　次

はじめに　　芳野市教育委員会　教育長　牛山英彦
例言・凡例
目　　次

第1章　調査の目的 …… 1

第2章　調査の方法と経過 …… 2
　第1節　調査の方法 …… 2
　第2節　調査の経過 …… 2

第3章　遺構と遺物 …… 6
　第1節　調査区の概要 …… 6
　第2節　検出された遺構 …… 13

第4章　まとめ …… 35

図　　版
抄録・奥付

第1章　調査の目的

特別史跡尖石遺跡は、指定地の用地購入が終わった翌年の平成2年度から、国庫及び県費の補助を受け、記念物保存修理事業(環境整備)のため継続して試掘調査が行われ、今年度で12回目を迎えることとなった。過去11回の調査については、それぞれ試掘調査報告書が刊行されている。また、整備についても先行して行った与助尾根遺跡の整備報告書を平成16年度に刊行している。

今回調査を行ったのは、尖石地区の南東側である。この地区は、宮坂英弐氏が昭和17年に調査を行い、列石と共に多数の土坑を検出した箇所の北側と東側にあたる。これまでの試掘調査の成果では、尖石地区からは多数の住居址が検出されているものの、拠点集落に通例な中央広場と考えられる場所が見つかっておらず、過去の調査例からしてこの箇所が最もその可能性のある所と考えられていた。それは、今後の尖石遺跡の整備を進めるにあたって、復元する集落の構造の検討や住居の時期選定に欠かせない重要な地点でもある。

この重要な地点の調査を行うにあたって、これまでの遺構の位置とプランを確認する作業、さらに遺構の時期を確認するための若干の上層の掘り下げだけでは、方形柱穴列などの土坑(柱穴)がセットとなるような遺構の存在を見過ごしてしまうとの考えから、土坑の集中する箇所は周辺も拡張し、遺構の性格を調査することとした。

第2章　調査の方法と経過

第1節　調査の方法

平成2年度に試掘調査を開始するにあたって、尖石遺跡全体を大きく4つに分け、北西隅をⅠ区とし、時計回りにⅡ区、Ⅲ区、Ⅳ区と区画の名称をつけている。その区画ごとに遺跡範囲の全体を覆うように東西南北にあわせて大きく10m四方の大きな正方形のグリッドで区切り(大グリッド)、x軸を大文字のアルファベット、y軸を数字で呼称している。さらにその大グリッドを2m四方の小さなグリッド(小グリッド)としてx軸を小文字のアルファベット、y軸を数字で表し、合わせてⅠ区A1a1のように呼称している。

今回調査の対象としたのは、遺跡の南東側である。前述したように、この場所は、かつて宮坂英弌氏が多くの住居址の発掘を目指しトレンチによる調査を行いながらも、住居址は確認できず、代わりに列石や多くの土坑を検出したところである。調査対象面積は約800㎡、調査面積は1/4の200㎡を予定した。

茅野市教育委員会で実施してきた試掘調査でも、平成4年度に今年度調査地区の南側において遺跡の東端を確認する調査を行っているが、その調査でも、遺構は土坑が数基検出されただけで、住居址は検出されていない。

掘り下げにあたっては、できるだけ少ない調査面積で住居址等の遺構の検出がすべて把握できるように、グリッドの間隔が4mを越えないように計画的に設定した。

第2節　調査の経過

現状変更許可の下りた6月27日・28日に基準杭測量、杭打ち作業にはいる。それを基に7月1日より調査区の設定、機材搬入作業に入る。

調査区の掘り下げに入ったのは7月5日からで、設定した調査区の南東側から掘り下げを行い、徐々に西側に進んでいった。同時に調査区の完掘状態の平面図と土層断面図を作製していく。

調査区は東西に走る空堀で分断されており、北側の市道沿いはアカマツ林となっている。調査は、最初、広場となっている空堀の南側を調査し、終了次第北側の林の中の調査に移ることにする。

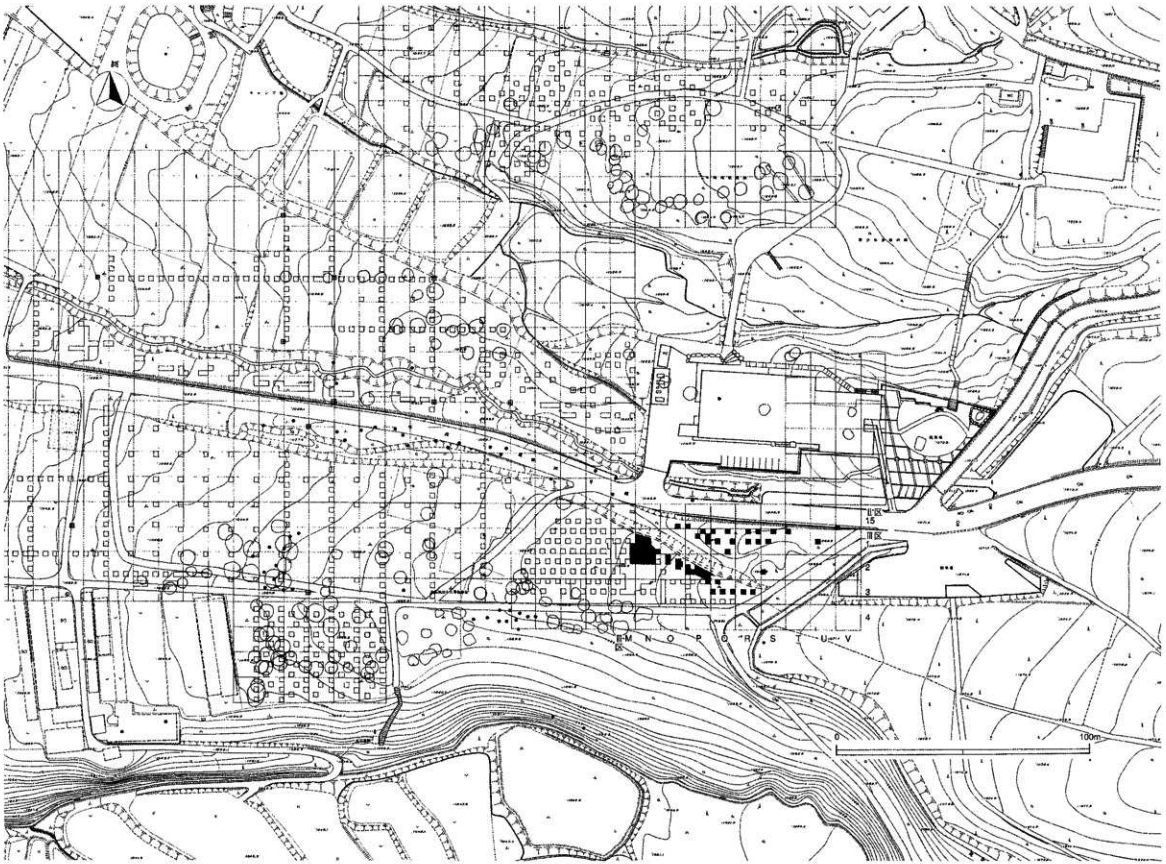
7月中旬からは、各調査区で検出した遺構の掘り下げも行い、写真撮影と図化を平行して行っていった。

7月20日にはⅢP2e5で住居址らしい掘り込みを検出し、翌日から確認のため拡張を行うこととする。

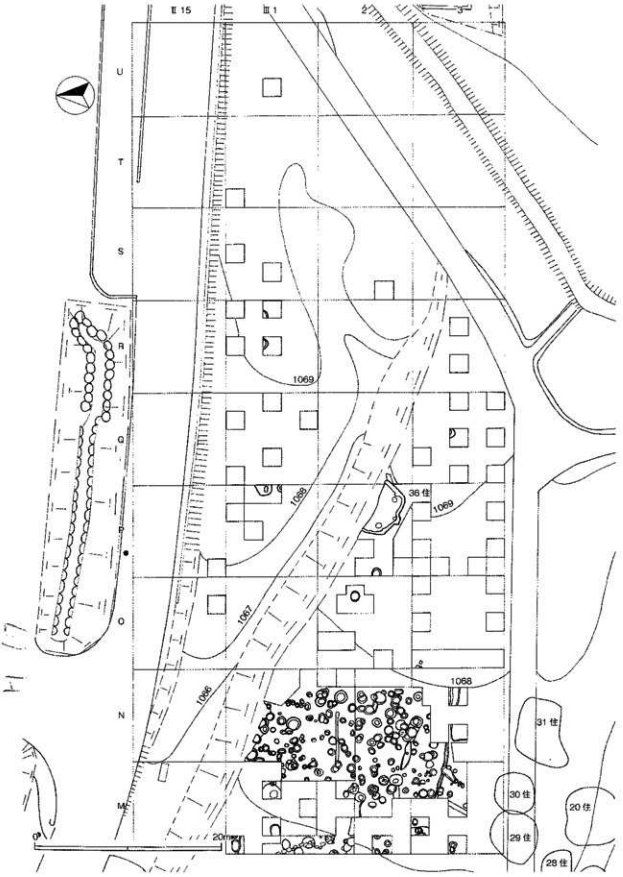
調査区の掘り下げでは、一昨年の調査区に近いことから、土坑の検出に期待がかかるが、調査を進めていくと予想以上にあることが確認され、徐々に拡張していった。また、一昨年と同様、柱痕を持つものも検出され、その間についても拡張して掘り下げを行い、土坑群の全容を明らかにすることとした。

空堀北側のアカマツ林の掘り下げは、南側の拡張を行うことになったためあまり人員を割くことができなくなったが、7月22日から、今度は西から掘り下げを行っていった。かつて畑であった南側の広場と異なり北側はアカマツの根のため掘り下げに手間取るが、遺構や遺物の検出も少なく、作業は順調に進んでいった。

調査した土坑群の掘り下げは、拡張して掘り下げた地点も含め掘り下げが9月14日までに終わり、翌15日から遺構の清掃と写真撮影にはいる。写真撮影は天候にも恵まれ、2日間で終了し、全体清掃と写真撮影も行い、直ちに平面図の作成作業にはいる。



第1図　周辺の地形と発掘区（1/1500）



第2図　発掘区と遺構の分布（1/400）

土坑群の図面作成の間、住居址の掘り下げと、林の中で重機での埋め戻しが難しい調査区の人力での埋め戻しを行った。また、重機での埋め戻しにおいて遺構が傷まないよう、人力で遺構の埋め戻しを行った。

現地での調査は、住居址平面実測図と断面図作成、埋甕の取り上げまでを9月28日までに終了した。

埋め戻しは、9月30日に重機により行った。また、発掘機材の搬出は10月5日に行い、遺跡内でのすべての作業を終了した。

第3章　遺構と遺物

今回検出・確認した遺構は、住居址1軒、土坑及び柱穴85基である。遺物は、検出した住居址が1軒だけで、半分以上が消失していたこともあって、これまでの調査で最も少なく、土器や石器、石片などを合わせてもコンテナ4箱ほどであった。

以下、掘り下げを行った調査区について記述し、次節で拡張区における遺構の検出状況を詳述する。

第1節　調査区の概要

Ⅱ O15d5(第3図)

本調査区は市道1級26号線と空堀の間に位置し、現在はアカマツ林となっている箇所の西端にあたる。表土層を取り除いた後、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げたが、遺物は縄文土器片2点、黒曜石片1点と少なく、遺構の検出はなかった。

Ⅱ P15a5(第3図)

表土層を取り除いた後、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り進めるが、遺物は縄文土器片が12点、黒曜石片が1点と少なく、遺構の検出はなかった。

Ⅲ N1e5(第3図)

表土層を取り除いた後、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り進めるが、遺物は縄文土器片が15点、黒曜石が1点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ O2d2・d3(第3図、図版11-1)

Ⅲ O2d2の南東壁際で遺構を検出したため、南側であるⅢ 02d3を拡張した。覆土はロームブロックの混入が多く、墓坑であると推測された。そこで、全掘できるよう東側のⅢ O2e2、O2e3の一部を拡張し、平面プランを確認した。検出した土坑は338号土坑と命名する。

Ⅲ P1c2(第3図)

表土層、暗褐色土層と掘り進めたが、遺構の検出はなかった。遺物は、縄文土器片が図示した1点(第15図4、図版12-3)を含め10点、黒曜石片1点、礫3点が出土しただけである。

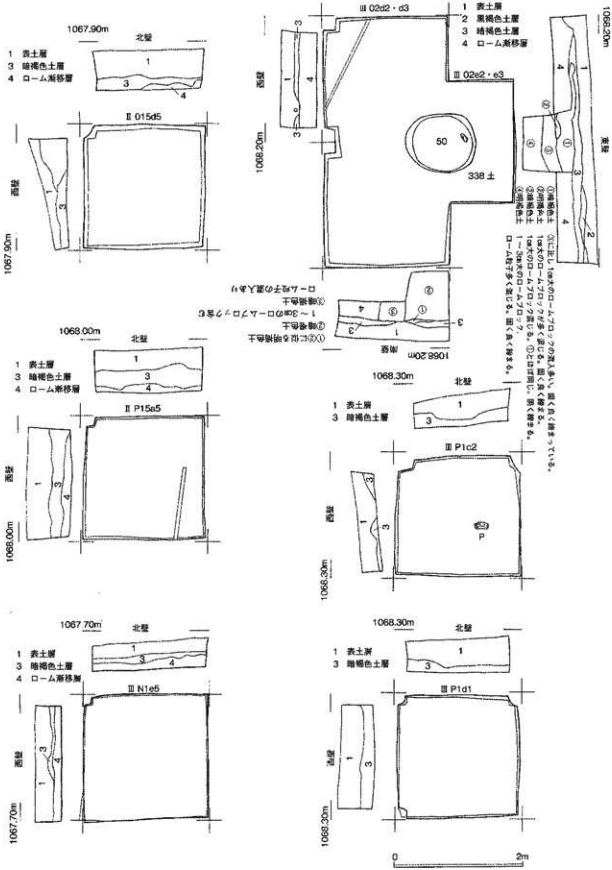
Ⅲ P1d1(第3図)

表土層、暗褐色上層と掘り進めたが、遺物は縄文土器片が2点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

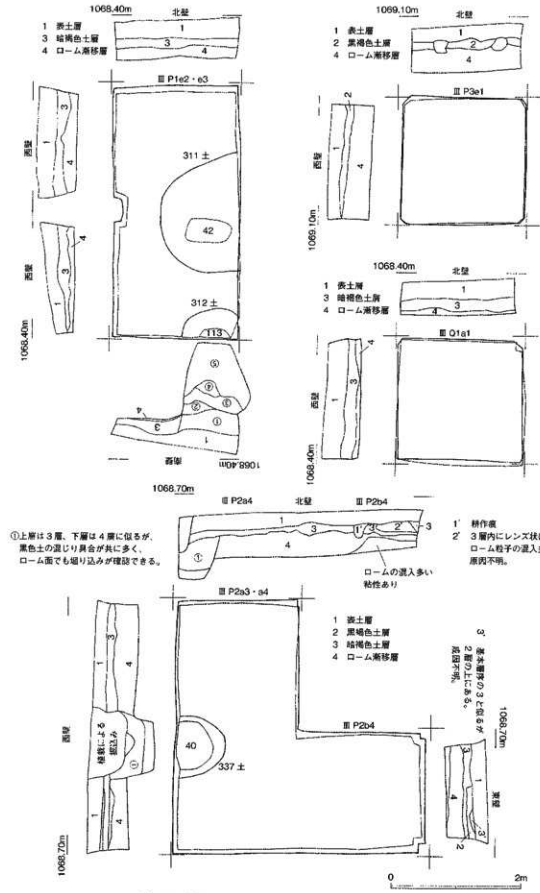
Ⅲ P1e2・e3(第4図)

Ⅲ P1c2の掘り下げを行ったところ、南東隅に遺構の痕跡が認められたため、Ⅲ P1e3を拡張した。掘り込みは不整形で、壁面底面とも凹凸が激しいことから、人為的なものではなく、倒木痕になるのではないかと考えられる(311号土坑)。

これとは別に、Ⅲ P1e3の南東隅で深さ113cmの掘り込みが検出された(312号土坑)。南側に木があり、



第３図　検出された遺構と土層堆積状態（1）（1/60）



第4図　検出された道構と上層堆積状態（2）（1/60）

拡張できなかったため全容は不明であるが、調査区の土層観察から、深さ140cmほどの陥し穴状の遺構になるのではないかと考えられる。

Ⅲ P2a3・a4・b4(第4図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったところ、Ⅲ P2a4の北西隅で遺構が検出された(337号土坑)。平成12年度に整備を行った際に植栽を行った樹木があり、拡張できなかったが、覆土がロームブロックを多く含んでいることから、墓坑になるのではないかと考えられる。遺構の規模は、遺構確認面からは40cmであるが、調査区の土層観察によると3層下部から掘り込まれており、深さ66cmほどとなる。

Ⅲ P3e1(第4図)

表土層、黒褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は石器1点(第16図4、図版12-6)、礫1点が出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ Q1a1(第4図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が6点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ Q1b3(第5図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が16点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ Q1d1(第5図)

表土層、暗褐色土層と掘り下げを行ったが、遺物の出土はなく、遺構の検出もなかった。

Ⅲ Q1d5(第5図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が9点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ Q1e3(第5図)

表土層、暗褐色土層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が6点、黒曜石片が2点、礫が1点出土しただけであった。また、遺構の検出はなかった。

Ⅲ Q3a3(第5図)

表土層、黒褐色土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が16点、石器が1点出土しただけで(図版12-7)、遺構の検出はなかった。

Ⅲ Q3b1(第5図)

表土層、黒褐色土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片9点、黒曜石片が4点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

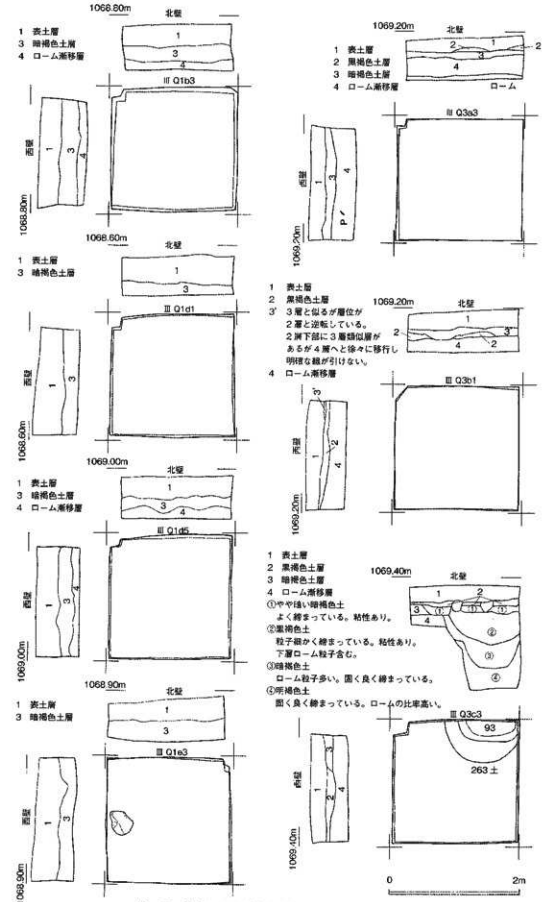
Ⅲ Q3c3(第5図)

表土層、黒褐色土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が3点、黒曜石片が1点出土しただけであった。遺構は、北東隅で遺構確認面から深さ93cmの掘り込みを検出したが、調査区の土層観察から深さ118cmほどの遺構になるのではないかと考えられる(263号土坑)。

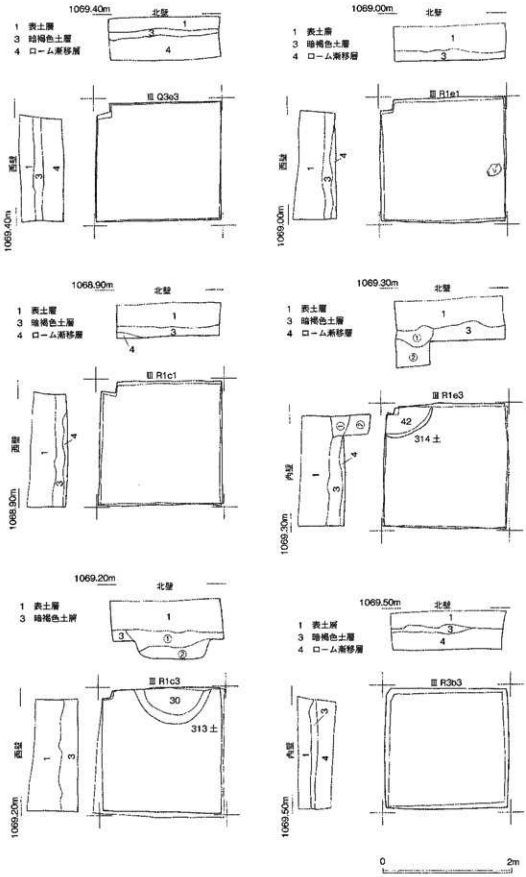
Ⅲ Q3e3(第6図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が5点、石器1点(第15図8、図版12-1)、礫1点が出土しただけで、遺構の検出はなかった。

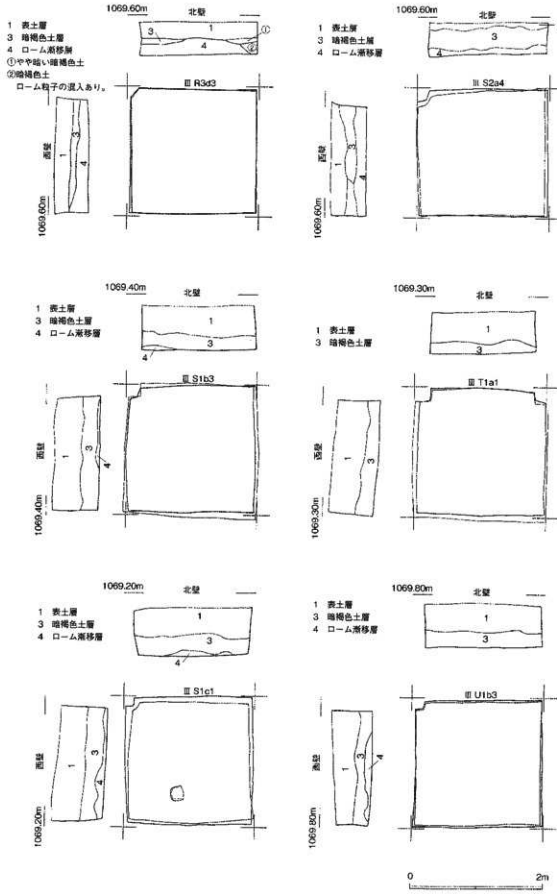
Ⅲ R1c1(第6図)



第5図　検出された遺構と土層堆積状態（3）（1/60）



第6図　検出された遺構と土層堆積状態（4）（1/60）



第７図　検出された遺構と上層堆積状態（5）（1/60）

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が3点、礫が1点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ R1c3(第6図)

表土層、暗褐色土層と掘り下げを行ったところ、遺物は縄文土器片が2点出土しただけであるが、北壁際で遺構が検出された(313号土坑)。

Ⅲ R1e1(第6図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物の出土はなく、礫が1点出土しただけであった。また、遺構の検出はなかった。

Ⅲ R1e3(第6図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったところ、遺物は縄文土器片が7点、石器が1点(第16図1、図版12-2)出土しただけであるが、北西隅で遺構を検出した(314号土坑)。

Ⅲ R3b3(第6図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は黒曜石が2点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ R3d3(第7図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が3点、黒曜石片が1点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ S1b3(第7図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物の出土はなく、遺構の検出もなかった。

Ⅲ S1c1(第7図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、南側で出土した礫の他、縄文土器片が4点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ S2a4(第7図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が5点、黒曜石片が1点、礫が1点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

Ⅲ T1a1(第7図)

表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物の出土はなく、遺構の検出もなかった。

Ⅲ U1b3(第7図)

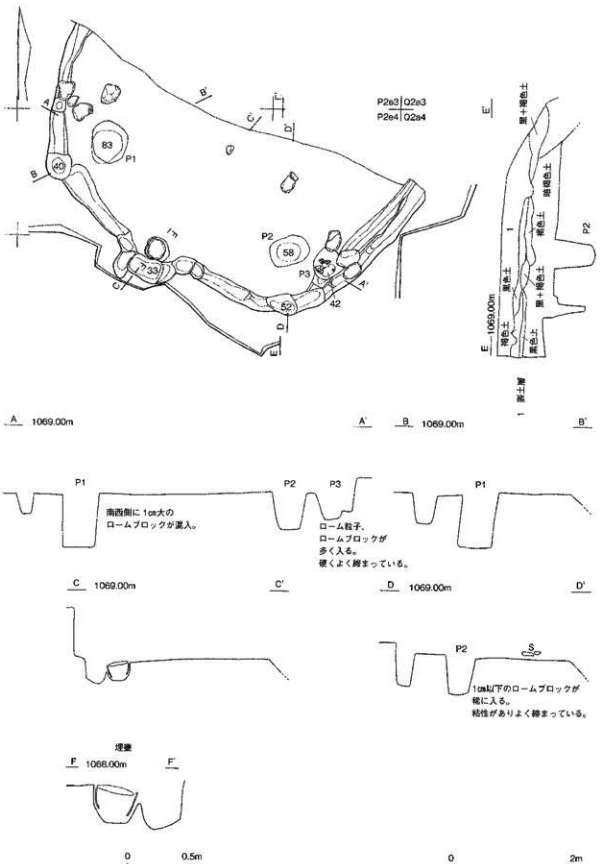
表土層、暗褐色土層、ローム漸移層と掘り下げを行ったが、遺物は縄文土器片が1点出土しただけで、遺構の検出はなかった。

第2節　検出された遺構

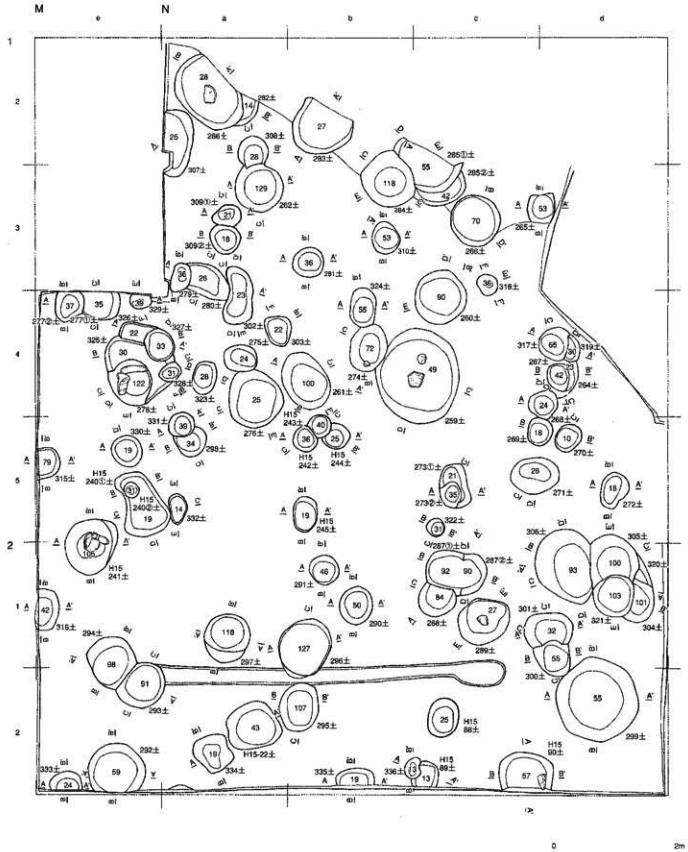
住居址

今年度の調査で検出した住居址は1軒である。これまで、平面プランを確認しただけのものについては、年度ごとに遺構の番号を付けてきたが、平成15年度の調査で未発掘の住居址を完掘し、宮坂氏の調査した住居からの通し番号である35号住居址として命名しているので、今回の住居址を正式に36号住居址として命名する。

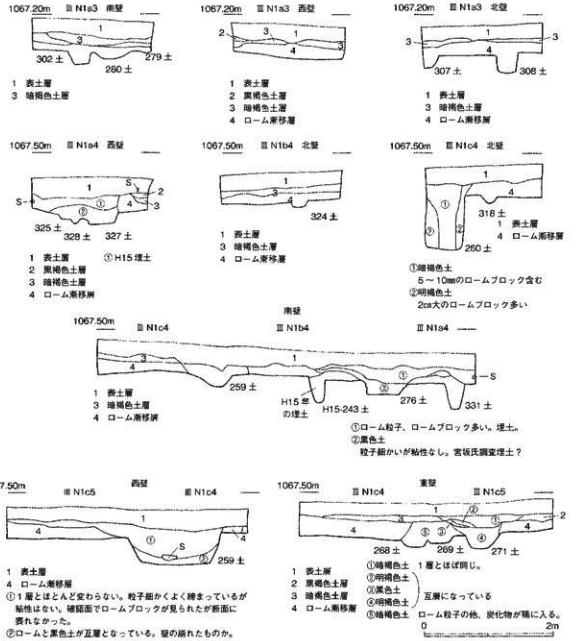
36号住居址(第8図、図版4-1～3)



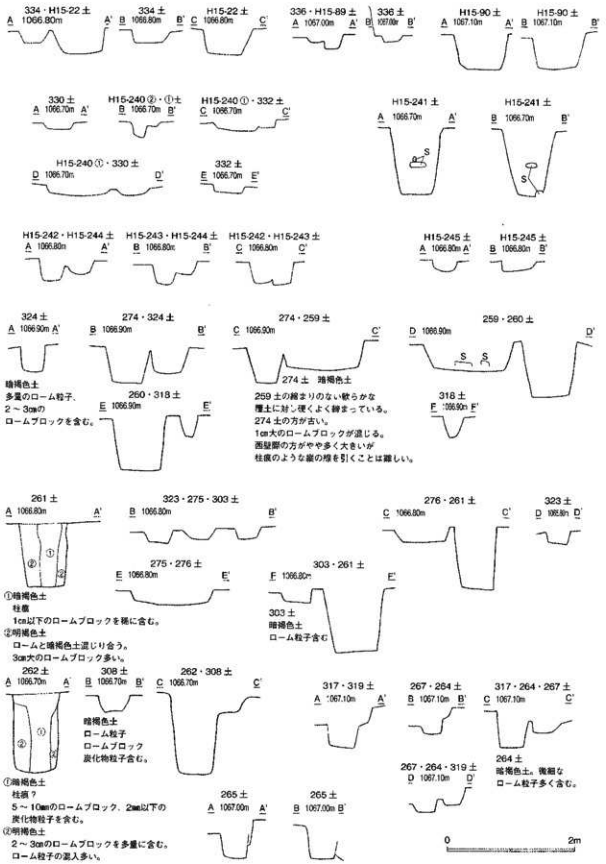
第8図　36号住居址（1/60）と埋甕（1/30）



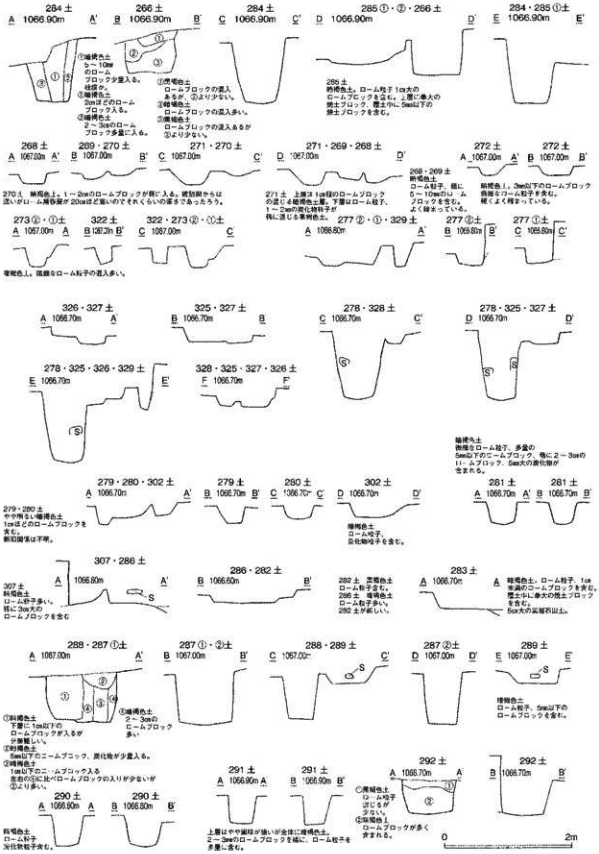
第9図　土坑群（1/60）



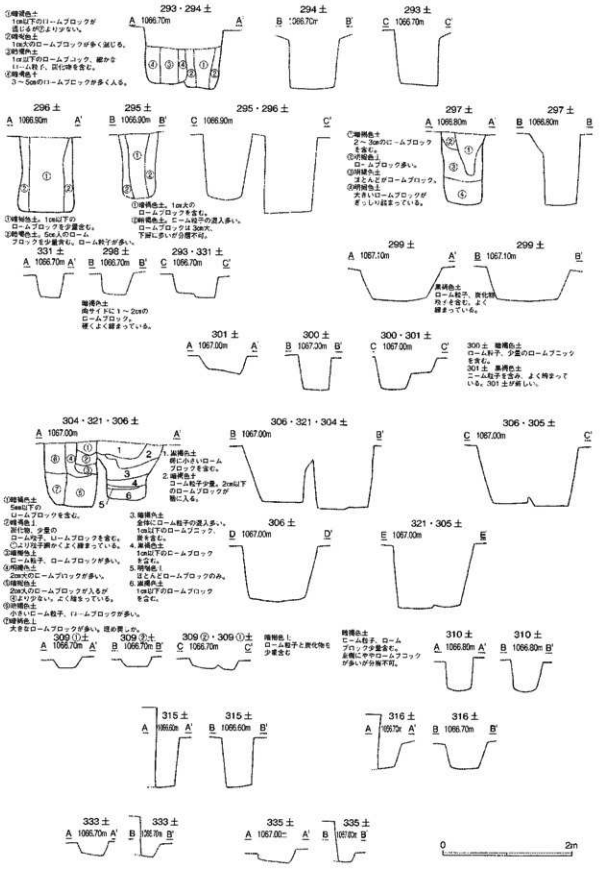
第10図　十坑群周辺の土層堆積状態（1/60）



第 11 図　上坑群断面図（1）（1/60）



第 12 図　上坑群断面図 (2) (1/60)



第13図　土坑群断面図（3）（1/60）

遺構の有無を確認するグリッド調査で、Ⅲ P2e5 から住居址ではないかと考えられる遺構の南東端が検出され、北側の Ⅲ P2c4 を拡張した。両グリッドを掘り下げる中で、遺物の出土状況などからこの遺構が住居址との確信を得、周辺を拡張し、プランの検出と掘り下げを行った。

住居址は北側を攪乱により掘削されており、半分以上を消失しているが、平面形は入り口部を角とし、やや直線的な辺を持つ六角形ないし八角形を呈するのではないかと考えられる。規模は残存する東西の箇所で径約 600cmを測る。深さは確認面であるローム漸移層からは 20cm弱である。地表面からの上層観察でも壁の立ち上がりがはっきりしなかったが、遺物の出土状態などから最も深いところで 40cmはあったものと考えられる。壁際には、幅 25cm、深さ 30cmほどの深い周溝が回っている。調査過程で、東壁の内側にも同規模の周溝がありロームで硬く埋め戻されていることから、住居の拡張が行われたと考えられる。こうした痕跡は西壁の側には確認できていない。柱穴は現存する主柱穴が 2 本で、他に壁際の各角の周溝内に 3 基ある。また、柱穴かどうかは不明であるが、南東側の壁際に土器の破片の入る掘り込みが検出された (P3)。その周辺には径 30cmを超える礫が 3 個出土している。主柱穴は大きく、径は 45cmから 60cm、深さも 58cmから 83cmと深い。炉は削平された部分にあったらしく、検出できなかった。入口があったと考えられる南西側に扁平の円礫があり、そのドから埋甕が検出されている。埋甕は正位に埋められていたが、口縁部及び底部が欠損している。主軸方向は、N-38° -E を指す。

遺物は小片ばかりで、図化できた土器は前述した埋甕 1 点と柱穴内から出土した土器だけである (第 15 図 1・2、図版 11-5・6)。本住居址の時期は、出土した土器から縄文時代中期後半の曽利Ⅱ式期になると考えられる。

土坑

一昨年の調査で、柱穴を含む土坑が特に集中している箇所が確認された。今回の調査区は、その北側にあたり、連続して多くの土坑が検出された。この中には一昨年と同様、柱痕を持つ柱穴も検出された。当初、グリッド調査により遺構の集中する箇所だけを拡張する予定であったが、遺構の分布範囲は徐々に広がり、一昨年の調査区と接するまでとなった。そこで、すでに調査した範囲まで拡張することとし、一部昨年の調査区も再発掘した。

この拡張した範囲内も含め、今回の調査では計 85 基の柱穴を含む土坑が検出された。遺構の名称については、一昨年の調査との混乱を避けるため通し番号とし、今年度は続き番号である 259 号から 338 号まで命名した。

また、調査した土坑の内、覆土の観察により柱痕の検出されたものは 9 基である。

これらの土坑のセット関係を確認するために行った面的な調査であったが、余りにも遺構の数が多く、大きさや深さも様々であるので、今のところセット関係を明らかにすることができていないのは残念である。今後、本報告までに、宮坂氏の残された資料の調査等を行い、方形柱穴列や建物址の存在を明らかにしていきたい。

259 号土坑 (第 9 ～ 11 図、図版 4-5・6)

Ⅲ N1c4 の西側で検出したため、拡張を行った。平面形は楕円形で、長径 150cm、短径 132cm、深さは遺構確認面からは 49cmであるが、調査区の上層観察からは 54cmほどとなる。底面から礫が 2 点出土している。覆土は、遺構確認当初から締まりのない軟らかな土質であったが、漆黒で、一度調査し埋め戻したような痕跡はない。274 号土坑と接しており、本址が新しい。

260 号土坑 (第 9 ～ 11 図、図版 4-7)

Ⅲ N1c3・c4で検出した。平面形はほぼ円形で、長径89cm、短径82cm、深さは遺構の確認面からは90cmであるが、調査区の土層観察からは100cmほどとなる。

261号土坑（第9・11図、図版5-1）

Ⅲ N1b4の南西隅で検出した。平面形は長円形で、長径95cm、短径68cm、深さ100cmを測る。半裁により、柱痕が検出されている。

262号土坑（第9・11図、図版5-2）

Ⅲ N1a3の北東隅で検出した。平面形はほぼ円形で、長径80cm、短径74cm、深さ129cmを測る。半裁により柱痕が検出されている。308号上坑と接しており、本址が新しい。

263号土坑（第5図、図版5-3）

Ⅲ Q3c3の北東隅で検出した。拡張できなかったため、遺構の全容は不明であるが、調査区の土層観察から深さ118cmほどの土坑になると考えられる。覆土は4層に分層できる。ローム粒子の混入があるが、いずれの層も硬くよく締まっており、自然堆積によるものと考えられる。遺構の性格は不明である。

264号土坑（第9・11図、図版5-4）

Ⅲ N1d4の西側にいくつかまとまっている土坑の内、267号上坑の東側に段差が見られたため、別の遺構とし命名した。平面形は不明であるが、断面形は皿状で、深さ23cmを測る。

265号土坑（第9・11図、図版5-5）

Ⅲ N1c3・d3の北側の空堀にかかる斜面で検出した。平面形はほぼ円形で、長径52cm、短径45cm、深さ53cmを測る。

266号土坑（第9・12図、図版5-6・7）

Ⅲ N1c3の北側の空堀にかかる斜面で検出した。平面形はほぼ円形で、長径・短径とも80cm、深さ70cmを測る。覆土は、全体にロームブロックが混じるが、特に中層に多い。

267号土坑（第9・11図、図版5-4）

Ⅲ N1d4の西側で検出した。この部分は拡張した部分で、調査区壁面の観察により、ローム漸移層上面で検出できた。平面形はほぼ楕円形で、長径45cm、短径35cm、断面形は皿状で、深さ42cmを測る。外側に264号上坑があり、その内側に位置するが、新旧関係は不明である。

268号土坑（第9・10・12図、図版5-8）

Ⅲ N1c4・d4の南側で検出した。平面形はほぼ円形で、長径45cm、短径44cm、断面形は皿状で、深さ24cmを測るが、調査区の上層観察から深さは40cmほどはあったものと考えられる。

269号土坑（第9・10・12図、図版5-8・6-1）

Ⅲ N1c5・d5の北側で検出した。平面形はほぼ円形で、長径44cm、短径40cm、断面形は皿状で、深さ18cmを測るが、調査区の十層観察から深さ35cmほどはあったものと考えられる。

270号土坑（第9・12図、図版5-8）

Ⅲ N1d5の北西隅で検出した。平面形は楕円形で長径47cm、短径39cm、深さ10cmを測る。遺構確認面からの深さは浅いが、ローム漸移層が20cmほどあることから、30cmほどの深さの遺構であったと考えられる。

271号土坑（第9・12図、図版6-1・2）

Ⅲ N1c5・d5で検出した。平面形は楕円形で、長径77cm、短径56cm、断面形は皿状で、深さ26cmを測るが、調査区の土層観察から深さ43cmはあったものと考えられる。

272号土坑（第9・12図、図版6-3）

Ⅲ N1d5 のほぼ中央で検出した。平面形は楕円形で、長径 58cm、短径 44cm、深さ 18cmを測る。

273 号土坑（第 9・12 図）

Ⅲ N1c5 の西側で検出した。命名後底面の形状から 2 基の土坑と判断し、273 ①号土坑と 273 ②号土坑に分けることとした。273 ①土坑は、平面形が楕円形で、長径 70cm、短径 45cm、断面形は皿状で、深さ 21cmを測る。273 ②号土坑は、平面形が楕円形で、長径 40cm、短径 34cm、深さ 35cmを測る。両者の新旧関係は不明である。

274 号土坑（第 9・11 図、図版 6-4）

Ⅲ N1b4 で検出した。平面形は楕円形で、長径 76cm、短径 60cm、断面形はバケツ状で、深さ 72cmを測る。259 号土坑に接しており、本址が古い。また、324 号土坑とも接するが、新旧関係は不明である。

275 号土坑（第 9・11 図、図版 6-5）

Ⅲ N1a4 で検出した。平面形は楕円形で、長径 51cm、短径 45cm、断面形は皿状で、深さ 24cmを測る。276 号土坑と接しているが、新旧関係は不明である。

276 号土坑（第 9 ～ 11 図、図版 6-5）

Ⅲ N1a4 で検出した。平面形は楕円形で、長径 94cm、短径 83cm、断面形は皿状で、深さ 25cmを測るが、調査区の土層観察から、深さ 45cmはあったものと考えられる。275 号土坑と接しているが、新旧関係は不明である。

277 号土坑（第 9・12 図）

Ⅲ M1e4 の北壁際で検出した。当初一つの土坑としていたが、形態が不整形で、底面にも段差があることから、2 基の土坑と判断し、277 ①号土坑（東側）と 277 ②号土坑（西側）に分けることとした。北側を拡張していないためどちらの遺構も全容は不明であるが、277 ①号土坑は、深さ 35cmを測る。277 ②号土坑は不整形で、長径が 60cmほど、短径 45cm、深さ 37cmを測る。覆土の違いにより新旧関係を明らかにすることはできなかった。

278 号土坑（第 9・12 図、図版 6-6）

Ⅲ M1e4 で検出した。325 号土坑と重複するが、遺構の検出状況により、本址の方が新しいと判断される。平面形はほぼ円形で、径 70cm、深さ 122cmを測る。壁際の北と西に 40cm以上の礫が充填されていることから、柱痕等の検出はなかったものの、柱穴と考えられる。覆土はロームブロックやローム粒子の他、炭化物粒子も検出されている。

279 号土坑（第 9・12 図、図版 6-7）

Ⅲ N1a3 の南西隅で検出した。東側に 280 号土坑があり重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は南北に長い楕円形で、長径 48cm、短径 30cm、断面形はバケツ状で、深さ 36cmを測る。

280 号土坑（第 9・12 図、図版 6-7）

Ⅲ N1a3 の南側で検出した。西側に 279 号土坑、東側に 302 号土坑があり重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長円形で、長径が 90cmほど、短径 48cm、断面形は皿状で、深さ 26cmを測る。

281 号土坑（第 9・12 図、図版 6-8）

Ⅲ N1b3 の南西隅で検出された。平面形はほぼ円形で、長径 50cm、短径 46cm、断面形はバケツ状で、深さ 36cmを測る。覆土にはロームブロックやローム粒子の他、炭化物粒子も含まれるが、柱痕等は検出されなかった。

282 号土坑（第 9・12 図、図版 7-1）

Ⅲ N1a2 の空堀にかかる斜面で検出された。北側が空堀により削平されているほか、西側で 286 号土坑と重複しているため全容は不明であるが、断面形は皿状で、深さ 14cmを測る。覆土の観察から本址の方が新しい。

283 号土坑（第 9・12 図、図版 7-2）

Ⅲ N1b2 の空堀にかかる斜面で検出された。北側が空堀により削平されているため全容は不明であるが、径 90cmほどの円形になるものと考えられる。断面形は皿状で、深さ 27cmを測る。覆土中より拳大の焼土ブロックが検出されたほか、径 5cmの黒曜石が出土している。

本址の時期は不明である。

284 号土坑（第 9・12 図、図版 7-3）

Ⅲ N1b2・b3 の空堀にかかる斜面で検出した。北側が削平されており、全容は不明であるが、平面形はほぼ円形で長径 90cm、短径 80cm、断面形はバケツ状で、深さ 118cmを測る。覆土を南北に半裁したところ、中央で柱痕が検出された。本址は 285 号土坑と重複するが、285 号土坑の覆土を取り除いた後で本址が検出されていることから、本址の方が古いと考えられる。

285 号土坑（第 9・12 図、図版 7-4）

Ⅲ N1b2・b3、N1c2・c3 の空堀にかかる斜面で検出した。北側が削平されており、全容は不明であるが、径 110cmほどの円形になるものと考えられる。断面形は皿状で、深さ 55cmを測る。覆土上面に拳大の焼土ブロックが認められたほか、全体に焼土粒子が含まれていた。南東側に一段高い箇所があるため、別の遺構とし、本址を 285①号土坑、南東側を 285②号土坑とする。285②号土坑は、全容は不明であるが、径 80cmほどの円形になるのではないかと考えられる。深さは 42cmを測る。両者の新旧関係は不明であるが、南西側で重複している 284 号土坑は、本址完掘後に検出されており、本址の覆土の状況から本址の方が新しいと考えられる。

286 号土坑（第 9・12 図、図版 7-1）

Ⅲ N1a2 の空堀にかかる斜面で検出された。北側が空堀により削平されているため全容は不明であるが、平面形は長円形で、長径 126cm、短径は推定で 85cmほど、断面形は皿状で、深さ 28cmを測る。東側で 282 号土坑と重複しており、覆土の観察から本址の方が古い。本址の遺構検出時に、中央で径 30cmほどの礫が出土しているが、底面からは 15cmほど浮いている。

287 号土坑（第 9・12 図、図版 7-5・6）

Ⅲ N2c1 の北西で検出された。当初 288 号土坑との重複だけであると考えていたが、完掘後観察すると、本址の南北壁の中央付近にくぼみが見られた。床面に段差はないものの、2 基の重複とし、西側を 287①号土坑、東側を 287②号土坑とした。新旧関係は不明である。

287①号土坑の平面形は重複により不明であるが、径 60cmほどの円形を呈すると考えられる。断面形はバケツ状で、深さ 92cmを測る。覆土の観察により、柱痕が確認されている。288 号土坑とも重複しており、本址の方が古い。

287②号土坑の平面形も径 70cmほどの円形を呈すると考えられる。断面形はバケツ状で、深さ 90cmを測る。287①号土坑を半裁する際に完掘してしまっているため、覆土の様子は不明である。

288 号土坑（第 9・12 図、図版 7-5・6）

Ⅲ N2c1 の北西で検出された。北側で 287 号土坑と重複しており、本址の方が新しい。平面形は径 60cmほどの円形を呈すると考えられる。断面形はバケツ状で、深さ 84cmを測る。覆土にはローム粒子の他、炭化

物粒子も混じるが分層は難しく、柱痕等は検出できなかった。

289 号土坑（第 9・12 図、図版 7-6）

Ⅲ N2c1 の中央で検出された。平面形は楕円形で、長径 80cm、短径 74cmを測る。断面形は皿状で、深さ 27cmを測る。本址の中央に底面から 10cmほど浮いた状態で礫が出土しているが、他に遺物の出土はなく、時期は不明である。

290 号土坑（第 9・12 図、図版 7-7）

Ⅲ N2b1 の中央で検出された。平面形はほぼ円形で、長径 60cm、短径 52cmを測る。断面形はバケツ状で、深さ 50cmを測る。覆土中に炭化物粒子を混入するが、柱痕などは検出できなかった。

291 号土坑（第 9・12 図、図版 7-7）

Ⅲ N2b1 の北西で検出された。平面形はほぼ円形で、長径 48cm、短径 46cmを測る。断面形はバケツ状で、深さ 46cmを測る。

292 号土坑（第 9・12 図、図版 7-8、8-1）

Ⅲ M2e2 の南壁際で検出された。南側に未掘部分があり全容は明らかでないが、平面形は径 91cmほどのほぼ円形を呈すると考えられる。断面形はバケツ状で、深さ 59cmを測る。

293 号土坑（第 9・13 図、図版 8-2・3）

Ⅲ M2e2 の北東隅で検出した。平面形は径 70cmほどのほぼ円形を呈すると考えられる。断面形はバケツ状で、深さ 91cmを測る。北西側に 294 号土坑があり重複している。覆土の観察から本址の方が新しい。また、覆土の観察から柱痕が確認されている。

294 号土坑（第 9・13 図、図版 8-2・3）

Ⅲ M2e1・e2 で検出した。平面形は径 70cmほどの円形を呈するものと考えられる。断面形はバケツ状で、深さ 98cmを測る。南東側に 293 号土坑があり、重複しているが、覆土の観察から本址の方が古い。また、覆土の観察から柱痕が確認されている。

295 号土坑（第 9・13 図、図版 8-4・5）

Ⅲ N2b2 の北西隅で検出された。平面形は南北に長い楕円形で、長径 77cm、短径 62cmを測る。断面形はバケツ状で、深さ 107cmを測る。覆土の観察により、柱痕が確認されている。

296 号土坑（第 9・13 図、図版 8-6・7）

Ⅲ N2b1 の南西隅で検出された。平面形は楕円形で、長径 92cm、短径 82cmを測る。断面形はバケツ状で、深さ 127cmを測る。覆土の観察により、柱痕が確認されている。

297 号土坑（第 9・13 図、図版 8-8、9-1）

Ⅲ N2a1 の南側で検出した。南壁側上部がやや崩れているが、平面形は径 70cmほどの円形を呈していたものと考えられる。断面形はバケツ状で、深さ 118cmを測る。柱穴になると考えられるが、覆土の観察からは明確な柱痕は観察できなかった。

298 号土坑（第 9・13 図、図版 9-2・3）

Ⅲ N1a5 の北西隅で検出された。当初、1 基の土坑として掘り下げを行ったが、底面に段差があったため、2 基とし、北西側を 331 号土坑とした。平面形は径 50cmほどのほぼ円形を呈する。断面形はバケツ状で、深さ 34cmを測る。壁面際にロームブロックの混入が多いが、分層できなかった。331 号土坑との新旧関係は不明である。

299 号土坑（第 9・13 図、図版 9-4）

Ⅲ N2d2 の北側で検出した。平面形は円形で、長径 132cm、短径 130cm を測る。断面形は皿状で、深さ 55cm を測る。覆土にはローム粒子の他、炭化物粒子も含んでいる。

300 号土坑（第 9・13 図、図版 9-4）

Ⅲ N2d1 の南西隅で検出した。平面形は楕円形で、長径 60cm、短径 55cm を測る。断面形はバケツ状で、深さ 55cm を測る。北側に 301 号土坑があり重複している。本址の方が古い。

301 号土坑（第 9・13 図、図版 9-4）

Ⅲ N2c1・d1 で検出された。平面形は楕円形で、長径 78cm を測る。短径は 300 号土坑によって切られているため明らかでないが、60cm ほどになるのではないかと考えられる。断面形は皿状で、深さ 32cm を測る。覆土の観察により、300 号土坑より本址の方が新しい。

302 号土坑（第 9・12 図、図版 9-5）

Ⅲ N1a3・a4 で検出された。平面形は南北に長い長円形で 90cm、短径は 46cm を測る。東壁と西壁の中央がややくびれており、2 基の土坑の重複とも考えられるが、明らかにできなかった。断面形は皿状で、深さ 23cm を測る。

303 号土坑（第 9・11 図、図版 9-6）

Ⅲ N1a4 の東側で検出した。平面形は楕円形で、長径 44cm、短径 38cm を測る。断面形は皿状で、深さ 22cm を測る。

304 号土坑（第 9・13 図、図版 10-1・2）

Ⅲ N2d1 で検出された。当初、本址と西側の 306 号土坑との 2 基が重複していると考え半裁を行ったが、土層や遺構の壁面、底面の観察などから最低でも 5 基の土坑が重複していることが明らかとなった。

本址は、西側で 321 号土坑、北側で 305 号土坑と 320 号土坑と重複している。覆土の観察から 321 号土坑より古いことは明らかであるが、他との関係は明らかでない。平面形は長径が 70cm 前後、短径が 65cm のほぼ円形を呈しているものと考えられる。断面形はバケツ状で、深さ 101cm を測る。

305 号土坑（第 9・13 図、図版 10-1・2）

Ⅲ N2d1 で検出された。306 号土坑、321 号土坑などと重複しているが、当初存在が明らかになっておらず、完掘に近い状態となってしまったため、新旧関係は明らかにできない。平面形は長径 90cm ほど、短径 75cm の楕円形を呈すると考えられる。断面形はバケツ状を呈し、深さ 100cm を測る。

306 号土坑（第 9・13 図、図版 10-1・2）

Ⅲ N2d1 の北西で検出された。305 号土坑と重複しているが、新旧関係は明らかでない。平面形は長径 120cm、短径 95cm の楕円形を呈すると考えられる。断面形はバケツ状を呈し、深さ 93cm を測る。

307 号土坑（第 9・12 図、図版 9-7）

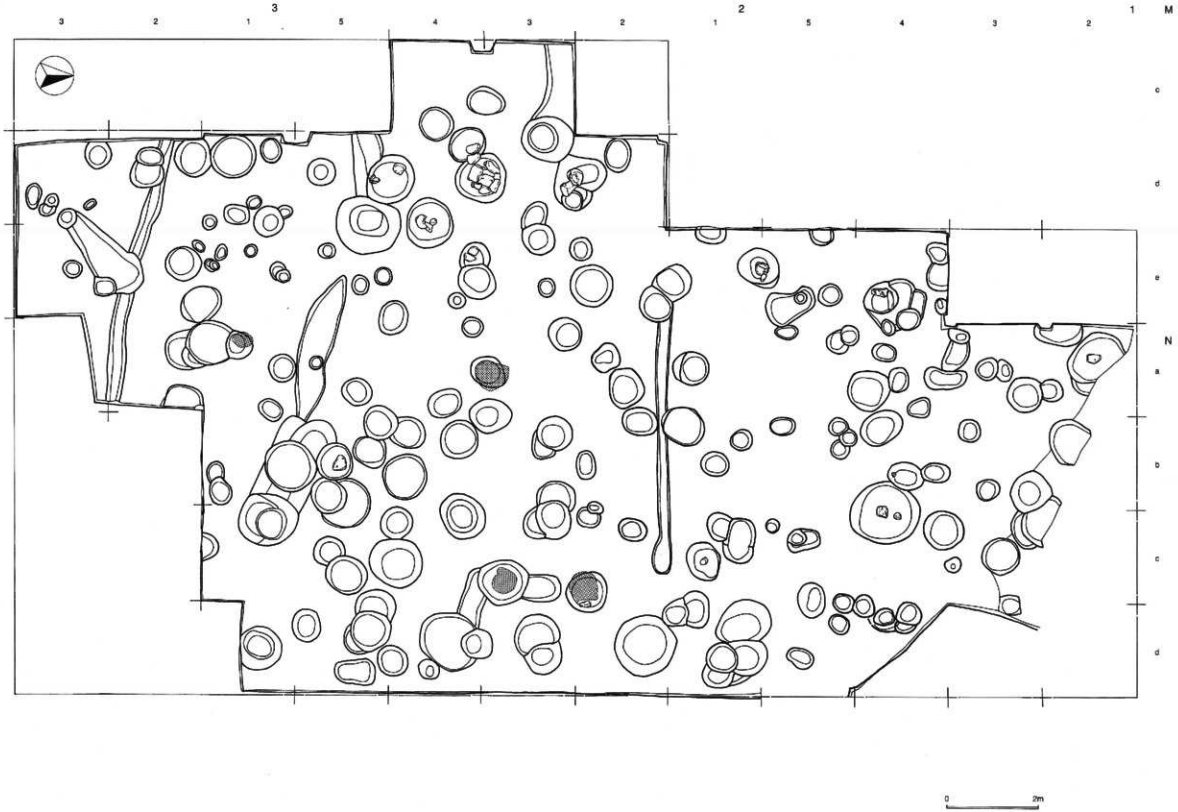
Ⅲ N1a2 の南西隅で検出した。西半分を未掘のため、全容は明らかでないが、南北に長い楕円形を呈するものと推測される。長径 105cm を測る。断面形は皿状で、深さ 25cm を測る。

308 号土坑（第 9・11 図、図版 5-2）

Ⅲ N1a2 の南東隅で検出した。南側を 262 号土坑によって失っているが、平面形は径 45cm ほどの円形を呈していたものと考えられる。断面形は皿状で、深さ 28cm を測る。

309 号土坑（第 9・13 図、図版 10-3）

Ⅲ N1a3 で検出された。当初 1 基の土坑として掘り下げを行ったが、東西の壁面の中央にくびれがあり、底面にも若干の段差が認められたため 2 基の土坑とした。北側の 309 ①号土坑は、平面形が楕円形で、長径



第14図　H15・17土坑群（1/80）

48cm、短径34cmを測る。断面形はⅢ状で、深さ21cmを測る。南側の309②号土坑は、平面形がほぼ円形で、長径48cm、短径46cmを測る。断面形は皿状で、深さ18cmを測る。両者の新旧関係は不明である。

310号土坑(第9・13図、図版10-4)

Ⅲ N1b3の東側で検出された。平面形は楕円形で、長径51cm、短径44cmを測る。断面形はバケツ状で、深さ53cmを測る。覆土の東側にややロームブロックが多かったが、分層はできなかった。

311号土坑(第4図)

Ⅲ P1c2の掘り下げを行ったところ、南東隅に遺構の痕跡が認められたため、住居址になるのではないかと考えⅢ P1c3を拡張した。掘り込みは不整形で、壁面底面とも凹凸が激しいことから、人為的なものではなく、倒木痕になるのではないかと考えられる。

312号土坑(第4図)

Ⅲ P1c3の南東隅で検出した。拡張できなかったため、全容は不明である。遺構確認面からの深さは、113cmほどであるが、調査区の土層観察により深さ140cmほどの隘し穴状の遺構になるものと考えられる。覆土は暗褐色土とロームの崩れた褐色土が互層となっており、いずれの土層も締まりがなく柔らかである。

本遺構からは遺物の出土はなく、時期は不明である。

313号土坑(第6図)

Ⅲ R1c3の北壁際で検出した。樹木により拡張できなかったため遺構の全容は不明であるが、2m北側のⅢ R1c1で遺構が検出されなかったことから、土坑になるものと考えられる。平面形は不明であるが、直径120cmほどであろう。遺構確認面からの深さは30cmであるが、調査区の土層観察により深さ44cmはあったものと考えられる。

314号土坑(第6図)

Ⅲ R1e3の北西隅で検出した。樹木により拡張できなかったため遺構の全容は不明である。深さは遺構確認面からは42cmであるが、調査区の土層観察により深さ60cmほどの土坑になるものと考えられる。

本遺構からは縄文土器片が1点出土しているが、時期は不明である。

315号土坑(第9・13図、図版10-5)

Ⅲ M1e5の西壁際で検出した。西半を未掘のため、全容は明らかでないが、径45cmほどの円形になるものと考えられる。断面形はバケツ状で、深さ79cmを測る。

316号土坑(第9・13図、図版10-6)

Ⅲ M2e1の西壁際で検出した。西半を未掘のため、全容は明らかでないが、長径64cmほどの楕円形になるものと考えられる。断面形はバケツ状で、深さ42cmを測る。

317号土坑(第9・11図、図版5-4)

Ⅲ N1d4で検出した。平面形はほぼ円形で、長径55cm、短径50cmを測る。断面形はバケツ状を呈し、深さ65cmを測る。319号土坑と接しており、本址の方が深いが、新旧関係は不明である。

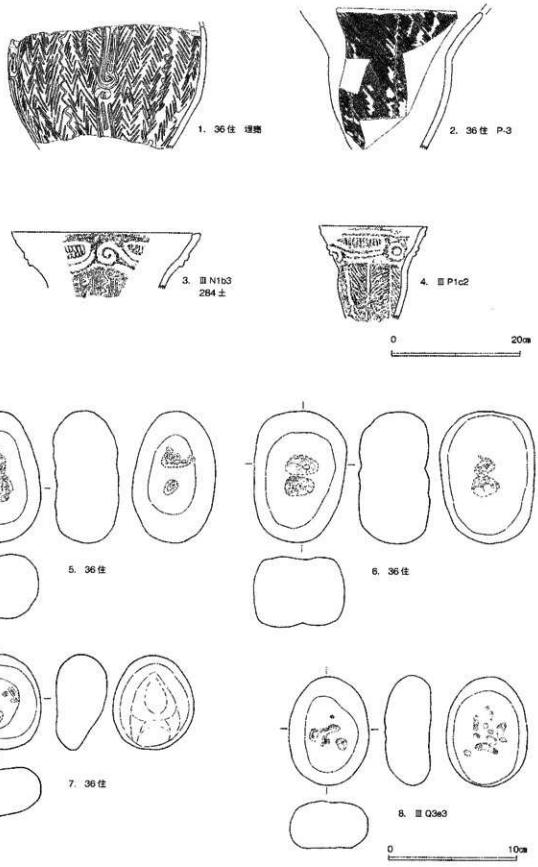
318号土坑(第9・11図)

Ⅲ N1c3の南側で検出した。平面形は楕円形で、長径34cm、短径29cmを測る。断面形はバケツ状を呈し底面は小さい。深さ36cmを測る。

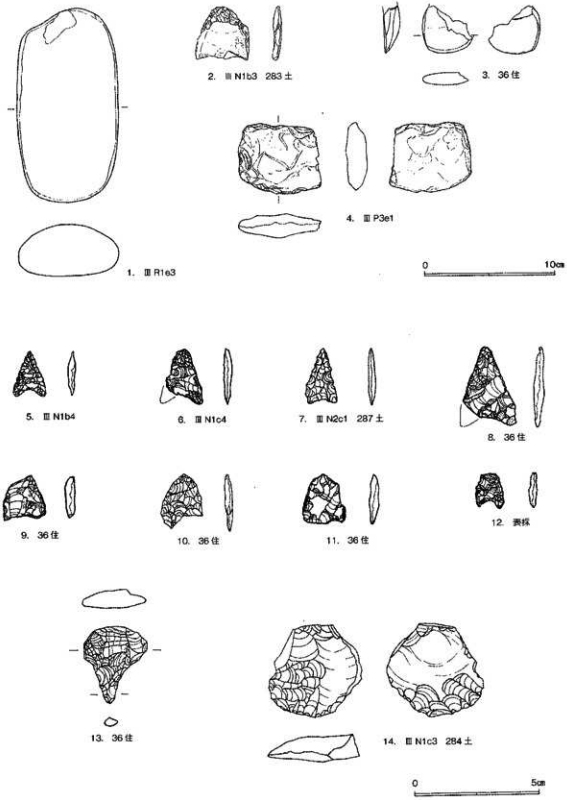
319号土坑(第9・11図、図版5-4)

Ⅲ N1d4で検出した。317号土坑と重複しており、全体形は不明であるが、短径35cm、深さ30cmを測る。

320号土坑(第9図、図版10-1・2)



第 15 図　出土遺物 (1) (1～4 は 1/6, 5～8 は 1/3)



第16図　出土遺物（2）（1～4は1/3、5～14は2/3）

Ⅲ N2d1 で 304 号土坑、305 号土坑、306 号土坑、321 号土坑などが重複して検出された北東側で、それらの遺構と異なる壁面を持つ一角があり、これについて新たに命名した。遺構の規模は明らかでない。

321 号土坑（第 9・13 図、図版 10-1・2）

Ⅲ N2d1 にある。304 号土坑と 306 号土坑の新旧関係を明らかにするため遺構を半裁したところ、その中間に底面がやや低くなる箇所があり、土層観察をしたところ両者よりも新しい土坑が存在することが確認され、新たに命名した。平面形態はほぼ円形で、長径 70cm、短径 65cm を測る。断面形はバケツ状で、深さ 103cm を測る。覆土の観察によると、別のこれよりも新しい遺構が重複しているように見受けられるが、掘り上げた後の遺構の壁面には現れてこない。径 35cm、深さ 50cm ほどの遺構である。

322 号土坑（第 9・12 図）

Ⅲ N1c5 の南西隅で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、径 30cm を測る。断面形はバケツ状を呈し、深さ 31cm を測る。

323 号土坑（第 9・11 図）

Ⅲ N1a4 の南西で検出した。平面形は南北に長い長円形を呈し、長径 52cm、短径 37cm を測る。断面形は皿状を呈し、深さ 28cm を測る。

324 号土坑（第 9・11 図、図版 9-8）

Ⅲ N1b4 の北側で検出した。平面形は長円形で、長径 63cm、短径 39cm を測る。断面形はバケツ状を呈し、深さ 55cm を測る。南側で 274 号土坑と接するが、新旧関係は不明である。

325 号土坑（第 9・12 図、図版 6-6）

Ⅲ M1e4 の東側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径 115cm、短径 105cm を測る。断面形は皿状を呈し、深さ 30cm を測る。4 基の遺構に接するが、278 号土坑については検出状況から本址の方が古いと考えられる。その他の遺構については、新旧関係は不明である。

326 号土坑（第 9・12 図、図版 6-6）

Ⅲ M1e4 の東側、325 号土坑の北側で検出した。325 号土坑と同時に掘り下げたが、別の遺構と確認されたため命名した。南側を 325 号土坑に、東側を 327 号土坑に切られており、平面形は不明である。断面形は皿状を呈し、深さ 22cm を測る。両者との新旧関係は不明である。

327 号土坑（第 9・12 図、図版 6-6）

Ⅲ M1e4・N1a4 で検出した。平面形は南北に長い楕円形で、長径 50cm、短径 42cm を測る。断面形は皿状で、深さ 33cm を測る。325 号土坑・326 号土坑に接しているが、新旧関係は不明である。

328 号土坑（第 9・12 図、図版 6-6）

Ⅲ N1a4 の西側で検出した。平面形は楕円形で、長径 35cm、短径 30cm を測る。断面形は皿状を呈し、深さ 31cm を測る。325 号土坑に接しているが、新旧関係は不明である。

329 号土坑（第 9・12 図）

Ⅲ M1e4 の北壁際で検出した。北側の一部が未掘であるが、径 35cm ほどの楕円形を呈するものと考えられる。断面形はバケツ状を呈し、深さ 39cm を測る。

330 号土坑（第 9・11 図）

Ⅲ M1e5 の北東で検出した。平面形はほぼ円形で、長径 51cm、短径 47cm を測る。断面形は皿状を呈し、深さ 19cm を測る。

331 号土坑（第 9・13 図、図版 9-2・3）

Ⅲ N1a5 の北西隅で検出された。当初、298 号土坑として掘り下げたうちの北西側のものである。平面形は長径 45cm、短径 40cmのほぼ円形を呈する。断面形はバケツ状を呈し、深さ 39cmを測る。

332 号土坑 (第 9・11 図)

Ⅲ N1a5 の南西隅で検出した。平面形は楕円形で、長径 50cm、短径 26cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さ 14cmを測る。

333 号土坑 (第 9・13 図)

Ⅲ M2c2 の南壁際で検出した。南側が未掘であり、全容は明らかでないが、径 51cmほどの円形若しくは楕円形を呈するものと考えられる。断面形は皿状を呈し、深さ 24cmを測る。

334 号土坑 (第 9・11 図)

Ⅲ N2a2 は、平成 15 年度に調査を行った箇所で、22 号土坑を検出しているが、その南西で新たに検出した。平面形は不整形で、長径 60cm、短径 60cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さ 19cmを測る。

335 号土坑 (第 9・13 図)

Ⅲ N2b2 の南壁際で検出した。南側が未掘であり、全容は明らかでないが、径 60cmほどの円形若しくは楕円形を呈するのではないかと考えられる。断面形は皿状を呈し、深さ 19cmを測る。

336 号土坑 (第 9・11 図)

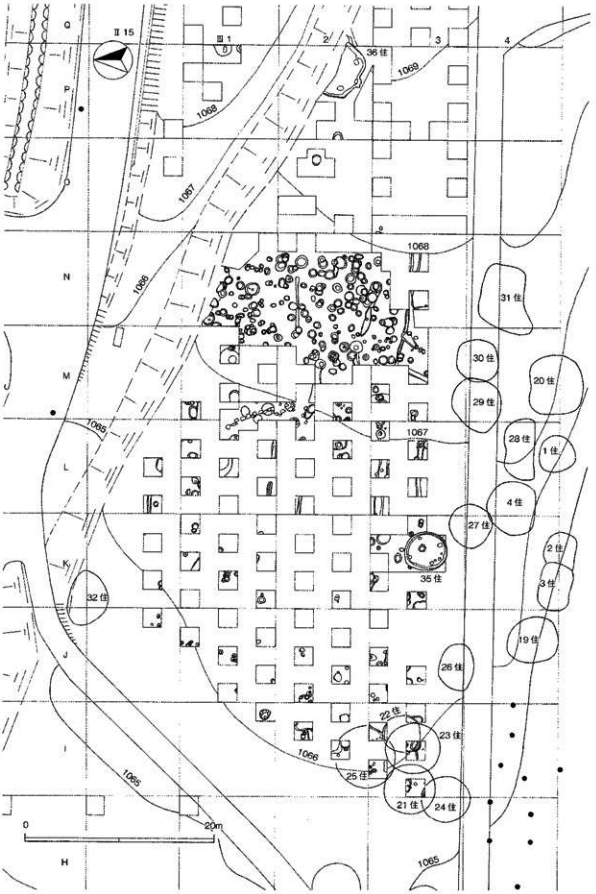
Ⅲ N2b2・c2 で検出された。平成 15 年に検出した H15-89 号土坑に接している。平面形は不整形で、長径 36cm、短径 30cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さ 13cmを測る。

337 号土坑 (第 4 図、図版 10-7)

Ⅲ P2a4 の北西隅で検出した。西側に続くが、樹木があることにより、拡張を断念した。遺構の全容は不明である。長径は不明であるが、短径 96cmを測る。深さは、遺構確認面からは 40cmであるが、調査区の土層観察により 66cmはあるものと考えられる。覆土はロームブロックを多く含んでおり、墓坑になるのではないかと考えられる。遺物は縄文土器片 31 点、黒曜石片 7 点、礫 6 点が出土しているが、小片であり時期は不明である。

338 号土坑 (第 3 図、図版 10-8、11-1 ～ 4)

Ⅲ O2d2・d3・e2・e3 で検出した。平面形は東西に長い楕円形で、長径 110cm、短径 90cmを測る。断面形はバケツ状を呈する。深さは遺構を確認したローム面からは 50cmほどであるが、調査区の土層観察により 75cm以上はあったものと考えられる。遺物は、底面の東側から縄文土器片 6 点、黒曜石片 3 点、礫 1 点が出土しているが、遺構の時期は不明である。



第17図　中央広場と周辺住居址（1/400）

第4章　まとめ

茅野市教育委員会では、平成2年度から尖石遺跡整備のための事前の遺構確認調査を実施してきた。今回調査を行ったのは、尖石縄文考古館の道を挟んで南側に当たる箇所で、尖石遺跡の中では南東に位置する場所である。宮坂英弐氏はこの地点の南側を調査し、多数の土坑や列石を検出している。

一昨年の調査で、宮坂氏の調査した土坑や列石のあるこの地点が広場としてよいのではないかと考えられる成果を得たが、その位置は遺跡の東端で、八ヶ岳山麓の縄文中期の集落の中央広場のある環状集落と大きく異なる様相を呈することとなった。そこで今回の調査では、さらにその北側と東側を調査し、住居址が東側や北側に本当に存在しないのかを確認することを第一の目的とし、さらに広場の広がりと性格を明らかにすることを目的とした。

その結果、調査区の東側に一軒だけであるが曽利Ⅱ期の住居址を検出し、調査をおこなうことができた。後年の空堀掘削により北側を半分以上削平された状態での検出であったが、この一軒の発見により、これまで尖石遺跡での上坑や柱穴が集中する箇所が集落の中央ではなく東端に寄った特異な形態ではないかとの疑問が解消されることとなった。また、空堀の掘削で消滅してしまった住居址が他にもあった可能性も残されることとなる。

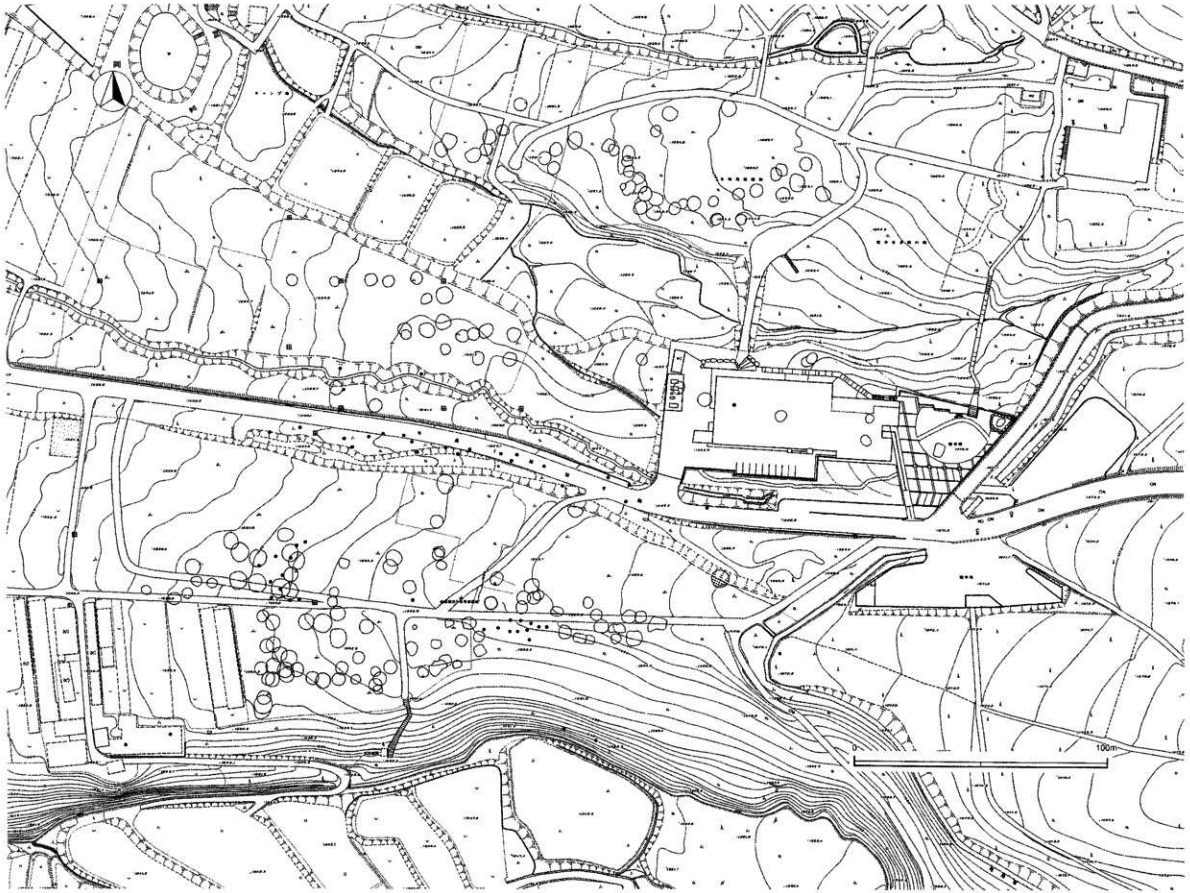
さらに、想定される中央広場と今回検出した住居址の関係から、現在考古館が建設されている与助尾根南遺跡で検出されている住居址についても、尖石遺跡群の小群と考えるのではなく、尖石地区の集落の北東部分とする見方も出てこよう。

また、墓坑や柱穴などが一昨年の調査区から続いて検出されたことで、広場としての性格も明らかになってきた。柱痕の確認された大きく深い小竪穴は、検出された数が非常に多くなり、その把握に苦慮している。正式報告までには検討をおこないたい。

今後さらに検討を続け、こうした成果を今後進められる尖石遺跡の史跡整備に取り入れながら、縄文時代集落を復元していきたいと考えている。

遺物は、住居址の検出が少なかったこともあって少ない。新たに発見した36号住居址からも、破片での出土は多いものの、復元できるまでに至った土器は、埋甕に使用されていたものが1点、図上復元によるものが1点だけである。土坑や遺構外出土の縄文土器も小片ばかりで、2点が図上復元できただけであった。また、墓坑にも副葬されたような特殊な石器は出土していない。

当初、調査対象面積約800㎡、調査面積は1/4の200㎡を予定したが、北側のアカマツ林は樹木を保護するため調査面積を減らさざるを得なかった。しかし、調査した各グリッドの様子から遺構の密度はそれほど濃くはなく、住居址の分布はないと推測される。南側の広場は、土坑の密に分布する箇所が検出されその性格を把握するため、さらに一昨年の調査で検出された土坑群との関連を探るため大きく拡張した。このため、全体の調査面積は256㎡と予定を上回った。

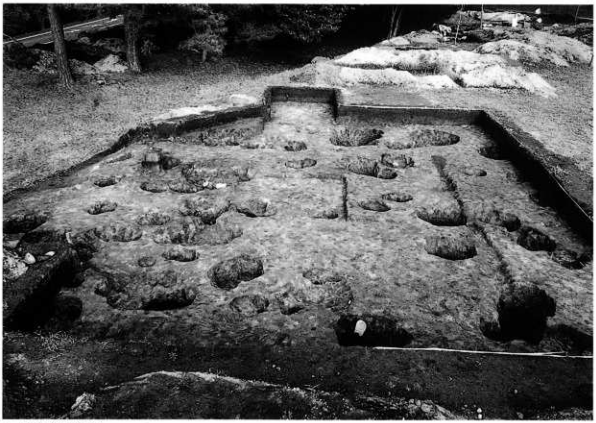


第18図　遺構分布図（1/1500）

1　作業風景（西から）

2　作業風景（南東から）

図版　2



1　土坑群（西から）

2　土坑群（東から）

1　土坑群（南から）

2　土坑群（北から）

図版　4

1　36号住居址　完掘　（東から）

2　36号住居址　東側周溝（北から）

3　36号住居址　埋甕（西から）

4　H15-241号土坑　完掘（東から）

5　259号土坑　半截（東から）

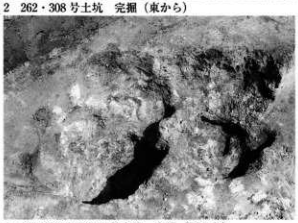
6　259号土坑　完掘（南から）

7　260号土坑　完掘（東から）

1 261号土坑 完掘（南から）

2 262・308号土坑 完掘（東から）

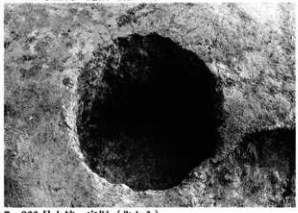
3 263号土坑 完掘（南から）



4 264・267・317・319号土坑 完掘（西から）

5 265号土坑 完掘（北から）

6 266号土坑 半裁（西から）



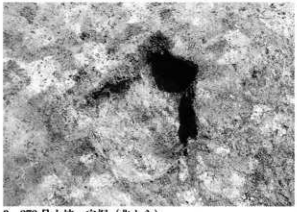
7 266号土坑 完掘（北から）

8 268～270号土坑 完掘（西から）

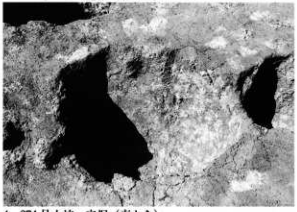
図版　6

1　269・271 号土坑　検出状態（西から）

2　271 号土坑　完掘（北から）



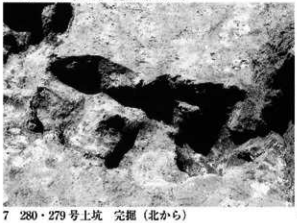
3　272 号土坑　完掘（北から）



4　274 号土坑　完掘（東から）

5　275・276 号土坑　完掘（西から）

6　278・325 ～ 328 号土坑　完掘（東から）



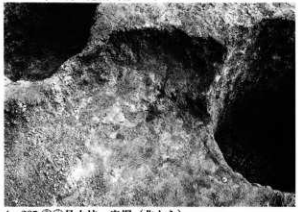
7　280・279 号土坑　完掘（北から）

8　281 号土坑　完掘（西から）

1　282・286 号土坑　完掘（北から）

2　283 号土坑　完掘（北から）

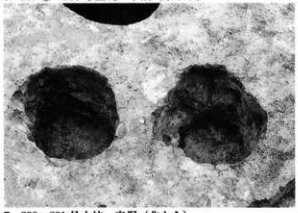
3　284 号土坑　完掘（北から）



4　285 ②①号土坑　完掘（北から）

5　287 ③・288 号土坑　半裁（東から）

6　287 ②①・288・289 号土坑　完掘（北から）



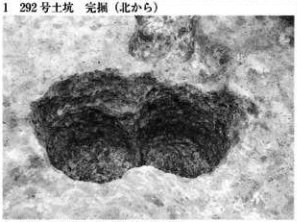
7　290・291 号土坑　完掘（北から）

8　292 号土坑　半裁（北から）

図版 8

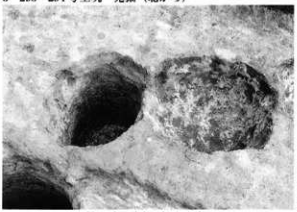
1 292号土坑 完掘（北から）

2 293・294号土坑 半裁（北から）



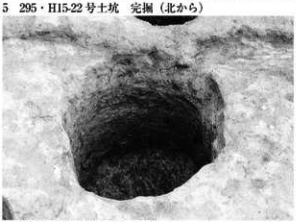
3 293・294号土坑 完掘（北から）

4 295号土坑 半裁（南から）



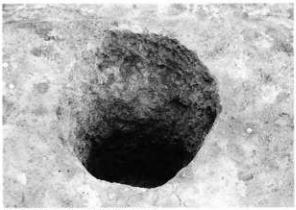
5 295・H15-22号土坑 完掘（北から）

6 296号土坑 半裁（南から）



7 296号土坑 完掘（北から）

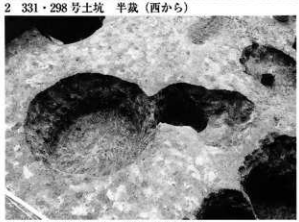
8 297号土坑 半裁（北から）



1　297 号土坑　完掘（北から）

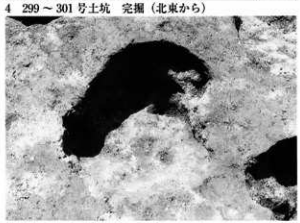
2　331・298 号土坑　半裁（西から）

3　298・331 号土坑　完掘（東から）



4　299 ～ 301 号土坑　完掘（北東から）

5　302 号土坑　完掘（西から）

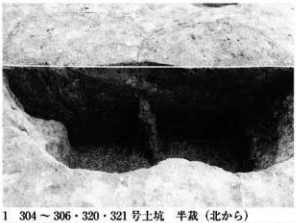


6　303 号土坑　完掘（北から）

7　307 号土坑　完掘（東から）

8　324 号土坑　完掘（西から）

図版　10



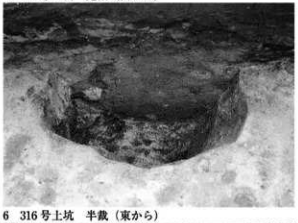
1　304～306・320・321号土坑　半裁（北から）

2　304～306・320・321号土坑　完掘（北から）

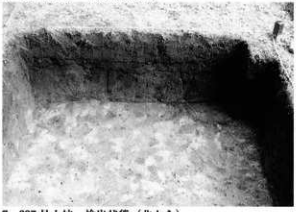
3　309②①号土坑　完掘（東から）

4　310号土坑　完掘（西から）

5　315号土坑　半裁（東から）



6　316号土坑　半裁（東から）



7　337号土坑　検出状態（北から）

8　338号土坑　検出状態（北から）

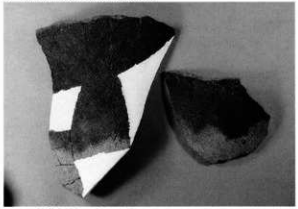
1　338号土坑　検出状態（南から）

2　338号土坑　検出状態（西から）

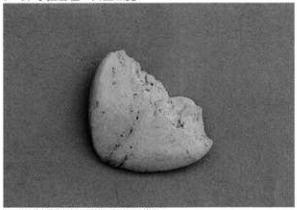
3　338号土坑　半裁（西から）

4　338号土坑　完掘（西から）

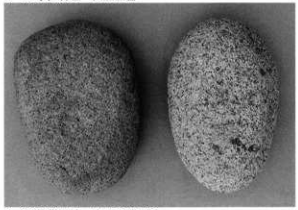
5　36号住居址　出土埋甕



6　36号住居址　出土土器

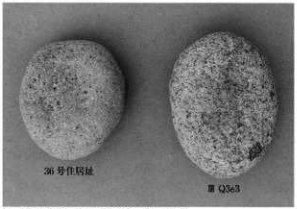


7　36号住居址　出土石器（1）

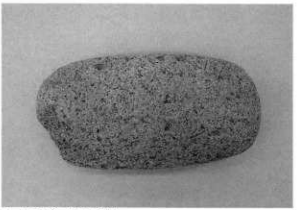


8　36号住居址　出土石器（2）

図版　12



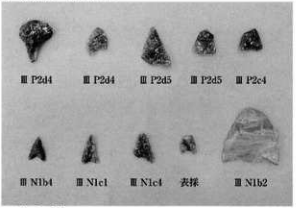
1　36号住居址・Ⅲ Q3e3　出土石器



2　Ⅲ R1e3　出土石器

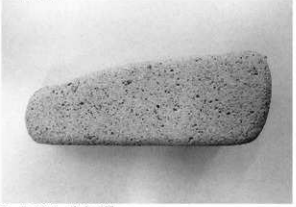
3　Ⅲ P1c2　出土土器

4　284号土坑　出土土器



5　出土石器

6　Ⅲ P3e1　出土石器



7　Ⅲ Q3a3　出土石器

8　283号土坑　出土石器

1　埋め戻し後

2　埋め戻し後

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきとがりいしいせき
書名	特別史跡尖石遺跡
副書名	平成17年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小林 深志
編集機関	茅野市教育委員会尖石縄文考古館
所在地	〒391-0213 長野県茅野市豊平4734-132 TEL 0266-76-2270
発行年月日	西暦2006年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
尖石遺跡（とがりいしいせき）	茅野市豊平（ちのしとよひら）東嶺（かがしだけ） 4,734-2963 2964他	20214	87	36° 0′ 36″	138° 6′ 40″	平成17年 6月27日 ～ 9月30日	256㎡	記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尖石遺跡（とがりいしいせき）	集落跡	縄文時代 中期	住居跡 1基 土坑・柱穴 85基	縄文土器 4点 石器 数点 等コンテナ 4箱	

尖石遺跡

―― 平成17年度記念物保存修理事業
（環境整備）に係る試掘調査報告書 ――

平成18年3月27日 発行

編集
発行 茅野市教育委員会
茅野市塚原二丁目6番1号
(0266) 72-2101

印刷 株式会社 長野メディアプロデュース